

## O1-059

## 集団生活への移行期にある双子への描画を用いたインタビュー技法の探索

安井 渚、新家 一輝、山崎 あけみ

大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻

## 【目的】

本研究の目的は、集団生活への移行期にある双子の成長する過程を明らかにする際、豊かな質的データを収集する上での母子インタビューの技法を探索することである。まず、子どもへのインタビュー、および描画を用いた文献を検討した。その結果を参考にし、5歳～7歳の双子と母親の4組に行った描画を用いたインタビュー結果から、今後の課題を検討する。

## 【文献検討による探索】

医中誌Web(ver.5)、J-STAGEを用い2004～2017年に掲載された論文で、「子ども」「インタビュー」「面談」「質的研究」のキーワードから552件、「子ども」「描画」「質的研究」から128件を抽出した。学童期までを研究対象とし、データ収集技法の中でも、感情の引き出しや倫理的配慮が詳細に記述されている文献を選定し、インタビュー4件、描画4件を分析対象とした。結果、いずれの研究でも導入段階に「グラウンドルール」が行われ、インタビューでは「ラポールの構築」「練習課題」が行われていた。インタビュー後は、中立的な話しやぬり絵を用いて気持ちの安定を確認していた。7歳以下を対象とした研究では、感情の引き出しは「手がかり質問」が必要であり、母親や教員等の身近な人物の情報を活用していた。

## 【描画を用いたインタビューによる探索】

上記文献検討の結果とNICHDプロトコル日本語版を参考に、双子と母親の豊かな質的データを収集するための技法について検討した。所属する大学の研究倫理審査委員会の承認後実施した。

対象者は、5歳6ヵ月(男女)、6歳3ヵ月(男男、一卵性)、6歳0ヵ月(女女、一卵性)、7歳11ヵ月(男女)の健康上課題のない母子であった。データ収集は平均60分を要し、会議室1組、自宅3組で実施し、逐語録とフィールドノーツを分析対象とした。結果、描画は、7歳では感情を引き出す一助となるが、5・6歳は他の「手がかり」が必要であった。双子の特徴として、「二人の世界」とインタビュアーとの「こちらの世界」を行き来し、双子が「二人の世界」に没頭した場合、母親がキーマンとなることで、より豊かな母子の相互作用のデータ収集につながる事が示唆された。

## 【まとめ】

インタビュー前後の子どもの目線に応じた倫理的配慮、年齢に応じたデータ収集設定の必要性が示唆された。また、双子では「二人の世界」の場面から、より豊かなデータ収集ができるインタビューガイドを作成していく必要がある。

## O1-060

植込み型除細動器植込み手術を受ける学童児に対する子ども療養支援士の役割  
—多職種と連携した取り組み—割田 陽子<sup>1</sup>、朝海 廣子<sup>2</sup>、阿部 真奈美<sup>1</sup>、  
荒木田 昭子<sup>1</sup>、白神 一博<sup>2</sup>、進藤 考洋<sup>2</sup>、  
平田 陽一郎<sup>2</sup>、犬塚 亮<sup>2</sup>、平田 康隆<sup>3</sup>、  
本田 京子<sup>1</sup>、岡 明<sup>2</sup><sup>1</sup>東京大学医学部附属病院 看護部、<sup>2</sup>東京大学医学部附属病院 小児科、<sup>3</sup>東京大学医学部附属病院 心臓外科

## 【はじめに】

成人の植込み型除細動器(ICD)植込み患者の精神的ケアに対する研究は多く報告されているが、小児の報告は未だ少ない。今回、他院で不整脈による失神を起こし、当院でICD植込み手術を受けた患児に対し、他職種と連携しながら不安や恐怖に対する介入を行った。その介入を振り返り、チームにおける子ども療養支援士(Child Care Staff: CCS)の役割について報告する。

## 【方法】

2016年3月から2017年3月に当院でICD植込み手術を受けた2例の診療記録から、CCSの介入と患児の反応を振り返り、CCSの役割について検討した。

## 【倫理的配慮】

患児と家族の同意を得て行い、個人が特定されないよう配慮した。

## 【結果】

対象は6歳と13歳の女児。2例とも転院時より環境の変化や先の見通しへの不安があり、13歳の児は失神再発の恐怖で歩行が困難になっていた。CCSの介入は『入院環境の適応』『感情表出』『病気や治療説明後の理解』『検査・手術の心の準備と達成感』『失神発作の不安』に分類された。遊びを通して感情表出を助け医療者へ代弁したり、検査・手術時は発達に応じたツールを用いて心の準備と達成感が得られるフィードバックを行った。失神発作の不安では、患児のペースで語れるようにし、発作時の対処方法を一緒に考えた。この結果、6歳の児は「早くシールもらいに検査に行きたい」と検査に前向きな姿勢を示し、「手術怖かったけどできた」と達成感を表現していた。13歳の児は「転院して何をやるのかわかって良かった」と見通しが持てたことや、「たくさん話を聞いてもらったら落ち着いた」と話した後に歩行ができるようになり、さらに「麻酔するときに、お母さんがいれば安心して眠れる」と手術を乗り越える方法も自ら考えられるようになった。CCSが医療者と協働して介入することで、患児らは主体的に治療に臨めるようになっていった。

## 【結論】

CCSは、患児が安心と信頼を持って医療者と一緒に治療に取り組めるよう、患児の立場で治療を調整する役割を担っていた。